

悠久の京を訪ねて Part II Vol.10



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

彩釉山水陶器と『山水の世界』

■山水の世界観

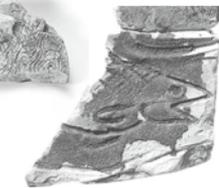
奈良時代に編纂された日本最古の漢詩集である『懷風藻』に「山水の世界」が詠われた詩が載せられていますが、木津川市馬場南遺跡の発掘調査で出土した「彩釉山水陶器」において、その具体的な姿を垣間見ることができます。

■馬場南遺跡出土の彩釉山水陶器

馬場南遺跡は聖武天皇の頃の寺院跡と考えられています。この彩釉山水陶器は、一辺20cm程度の粘土塊を数十個組み



馬場南遺跡出土の彩釉山水陶器



馬場南遺跡出土の山水陶器魚

京都府木津川市



合わせて、1.5mほどの大きさの造形物にしたもので、平面的には八角形(八葉)に復元されます。奥に山塊や洞窟、手前に水の流れや魚をヘラで刻み、山水の世界を立体的に表現していると考えられています。緑色や褐色の釉薬を掛けて、色鮮やかに作られた彩釉陶器で、中国の唐三彩の陶器の流れをくむものです。

■聖武天皇と山水の世界観

馬場南遺跡で出土した彩釉山水陶器とほぼ同じものは、三重県伊勢寺廃寺や平城京跡の調査で出土していますが、出土例は数例しかない貴重なものです。

これら彩釉山水陶器は、奈良時代の中頃、東大寺の大仏を造営した聖武天皇の時代のものです。この時代は九州で勃発した藤原広嗣の乱(740年)にかかわり、聖武天皇は平城京を出て、伊勢寺廃寺のある伊勢から尾張をまわり、恭仁京へ向かう東国巡幸をおこないました。彩釉山水陶器の出土地は聖武天皇の東国巡幸に合致しているところがあり、彩釉山水陶器と聖武天皇とのかかわりについても、今後考えていくべきものかもしれません。